中村俊定文庫
文庫 18
362

水口為より拝受せし
ものなり

俊宣

今や俳諧と称ふ事
ともなる浦安の春者
まて自五千おもふ宮事
四京物さ食等の掟目
たかをあるみ家まり松門亭
蕾求年比ゆ紙と学や
事故實とそら汀
這ふ浪の紙を紙新
にたるく花をまよ是乃
手移ら為ら諸補
ゆうひ初んのこそ初きま
長く稚者年刻を弘め

水口

ありし
髭号せよとこふに
素くる其風韻見るに
世ゆみむ二個やうく是や
列ちい六の種袋なりけん
かく戯を為む動汾筆を添
板元橘枝堂の需に
應る事忘れ

洪北
机墨庵
宗雅
書ス

叙

凡俳諧物しの多くかしはあり書
往々に有さくしてことと只其を
ての説而已ありしかを於く源
これ事とおろかなる物なし是
あるハ俳諧ハ滑稽をむねとしれば
なりとあるへし今此書ハ連俳
の起り并 面八句の古実口訣是は
多る論くあらしく師説は
志るひ是を記さと俳諧と云
義あるおふして四季の部分せハ
諸抄にあらさるへしとなりせる
事しとも多くれハ先師の集め
置給ひし滑稽雑談によりて
是を補ひ其中に公事并
中行事等の中註なくてハ初心
のわかちかたく物ハ粗あらはし有く
ことに用ひし具なる物ハ書

洩しぬ艸木鳥獸等の異名八
ちらしかき書加へ侍る且巻末
ふしてうらく數字の說字去りの
說多く近年語り来る物と新式
秘註御傘の口訣并所說等を
考合く初心の人は志ひとへ

貞德正傳三世四時堂人

宝暦戊寅季夏今日　雪莎坊書

中村俊定文庫

俳諧考古袋目録

一四季の詞　草木鳥獸異名　自正月至十二月
一雜季の辭
一七十二候　一月六候其記時候
一聯歌俳諧の古實　并和漢式大意
一連歌俳諧の差別
一俳諧式十首の歌　長頭丸　并十德
一面八句の事　并秘說
発句仕掛の支
服句の人得并演劇の服句

第三之変 并 名残の從
并 みこし(?)の変
四句目之変 并 四句目かろし
といふ説
五句目六句目七句目八句目之変
一 面八句之心得 并 面子嫌ふ詞
并 九句目 裏移りの句 十句目之変
一 連歌俳諧両用之詞
一 数字之説 并 字去りの説
一 附句之用捨
一 俳諧之式

俳諧季よせ(?) 四季之詞

春 蒼天 青帝 青陽 陽春 東君
春王 韶光 嘉節 嘉辰 芳春

正月 上陽 孟春 夏正 初陽
履新 新春 早春 聖節
端月 陬月 睦月 初空月 初見月
霞初月 初春月 祝月 太郎月(?)

立春 元日 元朝 元三 鶏旦
歳旦 年始 年頭 三元
鶏日 上日 三朝
三始 改旦
今年 ことしの春
初日
四方の春 ことし立 あら玉の春 初
年 初空 月の始 三の始

四方拝 星を唱ふ 若水 はつみ并 ひく
おさゞり 若ゑびす 初鶏
初夢 いね挙 いねつむ
門松 かざり竹 かざり縄 鏡餅 歯固(ハガタメ)
蓬莱飾 歯朶(シダ) かるかや(?) ゆづりは くろ句(?) 楪一葉(?)

胡蝶 胡蝶 小松殿 元日宴会 佐日参

年法 法方 [illegible]の祈祷 法祝 かけ朝

大ぶく後八 雑煮後八 大えぶみ 芋ぶら フトバシ 行基も [illegible] 大笹 み者

ぶどのみ ひぶき豆 ひぶ牛房 たぶぶぶ 串あわび 大のもの 年

玉 玉打 ぶぶ 緑打 ぶぶ ぶまろぶく ぶぶ ぶぶく

やりぶ ぶぶ弓 ぶぶ男 書初

ぶぶ 亀の付 初暦 ぶぶぶ ぶぶぶめ ひめ ぶぶぶぶ ぶぶぶぶ

ぶのぶぶぶ ぶぶぶぶ ぶぶぶぶ 初石始 松のぶぶめ 割掛の神ぶ

堂宿ぶ天初汐 庭ぶぶ

庚卸 庚申 初高 宝ぶ 水ぶひ あぶひ

初芝居 ぶ長ぶ 長

想文ぶ端初 三物 連歌 俳諧

東白ぶ日歌 柳営ぶ日歌 初寅 詩歌 番 玉歌

霞 霞の衣 霞の河 霞くむ 八重霞 霞の海 霞の網 ますひと 白玉姫

さか姫 東風 暄 ノドカ 長閑 麗

山笑 山慶 春の笑 永日 永

残雪 雪の雪 雪解 雪間 雪消の水 雪汁

氷 凍氷 氷室 氷ぶ

さぶ ぶぶぶむ ぶ日遊

みの日の長 小春曳 印杖 印槌 杖 七種 人日 摘草

白馬の節会 紫陸草の祝

ぶ 笙尾の笑 踏歌節会

ぶぶの踏 ツ 鞦韆 ワカレ 田亀打 コロビチ 爆竹 ハネ

小豆粥いろ〳〵なるの木　若餅

玄宮燈　落梅の曲　梅の実双個

梅の花　飛〳〵　大行〳〵　具足

焼ひる　法然忌　玄旨

白ひる　今〳〵　衣多　みめ多　経ち

接引　花〳〵　多〳〵　多

白ひる　今〳〵　衣多　松の花　十〳〵つゝ

多〳〵　多〳〵　多の琴　みゝ〳〵

花蕉　花〳〵　梅　梅壷　玄若

物〳〵　〳〵　ひる多の花　白

玄若　玄若　玄若　物名　梅園

玄〳〵　〳〵　花梅　行幸梅　やり梅

風物　みゝ〳〵の花

好文木　編音梅　花の兄　柳　箱柳　玉柳

門柳　玄若　柳　柳弱　柳のひく　風玄

玄〳〵　門〳〵　玄若　風玄　門玄

末柳　こぶ柳　枝の花

柳〳〵　風〳〵　柳

玄〳〵枝　玄枝　花入枝　猫玄

〳〵　歌葉　若菜　若菜

つむ　芝立　蓮の根　塩　海苔

根葉　〳〵　布

ひじき　玄〳〵　胡苔　玄〳〵

玄〳〵　玄〳〵　玄〳〵　玄〳〵

根白玄　艸の玄　玄〳〵　新玄

本地の焼縁

二月　仲春　如月　今月　中陽　夾鐘　衣更着　梅見月

雪消月　小玄生月

田と玄　畑　畑焼　焼野　荻の焼玄

玄〳〵の花　苗代　物〳〵　物〳〵

虫干　雷　〳〵　陽炎　遊絲　二日灸　物

午詣　春日祭　大原祭

積塔　朧月　玄〳〵　玄〳〵

去風 去年 二月

堂形ひ 粢 薪の紙

遺教経会 涅槃会

二月の別 嵯峨 狂言 彼岸 時正

社日 社翁 治葬酒 紙巣 鳥巣

ほとゝぎす 鳴 捌 鳥 鈴子

さゝ 鶯 雉 こゑ

山ゝ 鳴 狩 鳥 燕

石燕 白燕 乙鳥 帰丁 丁の鳥 小鳥丁 雲雀

ひばり ひばり笛 白鳥 鶴 雀の子

百舌鳥 松毛虫 鷺

鶯 あまうそ 駒鳥 昼鳥 鳥物

鳥遊牝 猫の妻乞 蝶 胡蝶

蜂 山蜂 仏蜂 蜂の巣 蛇 蛙 蛙

地虫 蛇穴 蛇 魚 鳥

物翻 蜆 蜷 蟷螂

寄居虫 飯蛸 蛸 鮑

油女 紅梅 未開 接木

の芽 藻 花 物花 物

楊 彼岸さゝ 糸ゝ

焼さゝ ちごさゝ

下萌 若紫 角組芦 種

まく 麻 藍 蓮翹 菜

の芽 大根 ゝ

土筆 松菜 苦 唐ちさ 菠

薺 蒲公英 たんぽぽ 蒜 のびる

仏者 あさひな 陽炎 屏風

猫活 山葵 蕨姑 くわい 蓮

の根 苗代菫 すみれ 蕨 わらび

紅梅衣 さくらぎ衣 うぐひす衣

三月

季春 姑洗 竹秋 桜月 弥生 梦見月 春惜月

霞月 花見月

己の月 稲 三月の節 上巳 元巳

曲水の宴 流盃 桃の酒 桃の節

雛祭 雛食 禁煙 禁火 楡柳の

芽と揚へ 生日 永日

伊吉波干 古伝の海賊名

出代 千生大念仏 さだ大念仏 千女念仏

法眼拭 高雄山女詣 や

もらひ祭 人丸供 ほうそう供

順の峯入 鎮花祭 稲荷

法お 燈ともぐ 竹生島

ミツナギ 水無月 鞦韆戯 ぶらこ 上り簗

ぶらこ 亀帰 雲水入

多 麦 麦搗 杜鵑巣 鹿

の角落 鬱 蕨 柳の糸魚

糸鮎 あゆ 鮎 鯔 桜鯛 櫻鯛

さくらめ 貝 鰯 花鰹 花の幡 花の絵 花宴

花軍 花の姫 花車 花の殿 むの雪

成の滝 成の宴 成の宴 成の紙 むくろ

花のうぐひす　花の唇　人の むし　花の姿　花の姿
むしの音吹　花の笑　花のうぐひす　花ひら　むし
の図　花畠　花の宮　むしの扉　花稲　むし
の袖　花衣　花盃　花鏡　花笹　花笠
花筏　むしろ　花ぼうろ　櫻　八重櫻
むしかご　むとろ　櫻人　柳夫妻
垣の匂櫻　相ぶ若　普賢像　くるの尾
巻山府君　車ぐるま　ふくつま　白さく
いせさくら　江戸櫻　淺美櫻　ふじの櫻
漏さくら　紫山櫻　布引さくら　鉢櫻
樺さくら　庭さくら　家櫻　為見ぬ
爰見ぬ　仏石　花見ぬ　花見ぬ
挿頭ぬ　人丸櫻　大さくら　
さくら田　櫻戸　櫻人　櫻ろ　桃の花
日月桃　ちぐさ桃　三千代桃　
御酒古ぬ　白桃　ひめ桃　梨
の花　わのつま梨　海棠　
生のうり梨　

堂の花　林檎の花　楸の花
杏の花　小梅花　本筆花
蘋婆の花　本仇花　物梅花

胡桃の花　馬酔木の花　躑躅
らんぢく　黒ぢく　
ぢの花　ぢく　姫つぢく　石巖花　沉
木花　五加木　枸杞　茶摘
茶のこころ　令法　つり山吹　
ぐみ　ぐみ　山根まつ　虎杖
さくつま　雲とみれ　一夜ま　二夜ま
ぢの花　藤　二季くさ　
ぢの花　母子草　金盞花　通
ぢむ　さくぢま　七重花
前　肩沢ぐみ　九蒲ま　化偷ま
馬蘭　春菊　吾妻くさ　花蔓
ま　菊苗　ぐさ　丁子草　仙

蕎麦 菊花 荷竹 三葉竹

硅菜 蓬さうし 朱蓮

夏と紅 夏ちる 黄春 三月尾 生ふく

夏の漆 ゆく春 春の名残 春の名残 春ふかし 春を惜む 春はあけぼの

夏

朱明 朱夏 三夏 九夏

朱律 盛夏 昊天 光節

四月

正陽 孟夏 余月 陰月

乾月 清和 中呂 卯月

行の花月 紅緑月

衣ゝ 更衣 白ゝ孫 給 絽 ぬき 青簾

氷の貢 虎杖弘 神祭 榊 榊ゝ

清水 絽ゝ、山王、山神、梅天、

賀の祝、八朔、多賀ゝ、参詣、当番、

一番ゝ、当ナ、大祝、杜布、大系、

杜尾、候機、清水ゆ、日光、

山彦、端祭、虎狩、あやめ、菖蒲

中山、大津、ち巻、新日吉、

佛生日 灌仏 浴仏 うぶ湯 結夏

夏入 夏出

一夏ゝ 夏ゝ 当ナ 跡供養

子園子 矢數 鮎 雀ゝ

ゆゝ ゆゝ 蚊帳 蚊ゝ 蚊遣

蔵系雀 ゝ 時鳥 皆代鳥

あゝ鳥 山田ゝ花 不如帰 ゝら鳥

玉迎鳥 立鳥 なまゝら いりせ鳥

ちゝ鳥 ゝゝた鳥 さゝめ鳥 ちゝ鳥

童子鳥 百舌鳥 夜ゝ鳥 くゝゝ

鶯 鶯鳥 常鶯 鶯の春 春丈八 ひとよ付

鹿ノ袋角 子子 蟬 蟬

蛛の子 飛蛾 鯉 石鮒 鯉

馬賊 生鯉 彩樹 結の実 茂ゝ

徐花 茅楓 茅花 抽花

卯の花　初夏に咲く　柳の花　きまくの
金柑花　梅の花　櫻の花　夏柳
花　桜の花　白丁花　楊
の実　牡丹　皐月に咲く　北国に咲く　山ちさの　躑躅
名ゐなし　こゝあり　てるかるも　夜白色　苟
冢麦　菜の花　宰相　牡丹　君　紅花
あくび　二月に咲く　取入れ　蓼　ちゝ蓼
薔薇　ゆさ　さゝむ　地ゝり花　蜀
栗花　白木花　宝澤花　風
車花　光琳花　岩菊　文
字拐の花　菜拐　苔の花

玉巻葛　玉巻芭蕉　蓼
利根　ジュン　いぬさて　菊菜　蓮の根
麦　麦の秋風　菜の花　筍　今年行
都州州王　茂る木
夏本立
五月　仲夏　皐月　五月　梅月　早月　暑月　熟月　水無月　田の月
くもり月
五月雨　梅　梅雨　虎の皮　加茂足掘
菖蒲の　菖蒲の　一本カ　一ヒカ
茅王　端午の茅　粽　削りの甲
茅の実と掘　百の実　掘　粽
茅の花　孤
畳人　馬　乗る　巣の義　とつ
取　競　競波

さの蔭　神水　地　茂
の森　今宮　山田御田植
住吉　田植　有無月　大原
志　夏至　夏土垢離　祇園
清流　蚊　蚊遣り火　線打　鶏
川　鶏人　蛭　蜻蛉　水雞
獣狩　狩人　螢　夜涼　蝸牛
蟻の子　鹿の子　水鳥巣
羽抜鳥　蛇の抜殻　田植
早乙女　田植　帷子　辻
ごえ　栗の花　搾乳　合歓
のむ　柘榴の花　南天の花

巴旦杏の花　柿の花　夏陽柳
青梅　梅　早桃　桃
楊梅　青山椒　生姜　桃
覆盆子　天蓼　百合　百人
車百合　ひめゆり　真菰刈
ふくろ　高　水草の花　藻の花
和布刈　青番椒　茨花
さるとりの花　紫陽花
浮草　下蕨の花　紅花
萱草の花　金花花
忍冬の花　夏菊　朔日草　蚊帳草
羊蹄花　酢将花　蛇床

杜鵑花 ほとゝぎす　石竹花 草石

蠶 藜 莧 薑 栗蒔 ひへ

きびゝ　麻まき　夏大根 荊胡 早瓜

白瓜 黄鐘調

六月 本文夏 林鐘 みなつき月 常夏月 涼暮月

松風月 待か

氷室 氷室の貢 氷室の儀 氷室の雪 氷餅いゝ 暑気

納涼 風の涼 月涼 夕涼

暫涼 暫涼 雲の峯 丹波の行法

土用干 虫干 虫ほし 泉殿 泉水あり 滝殿

扇 日傘 清水むすぶ 清水

水飯 ひやし麦 葛水 氷水

煮冷 夏切 冬切 醒酒 一夜酒

夏痩 扇 風流 風流 扇 風流

團扇 抱籠 竹夫人 竹奴 脚る

紙園 紙 紙人 田楽 竹生 竹 藪 藪 脇息 志戸呂

天法 座 天法 座 座 志戸呂

涼の涼 冬 士船 の市 住吉 猿

鞍馬竹切 石 岩 石 指 唐 千指

雞頭 雞頭 あ花の後 花 弟の姉 姉 花

川社 花 川 花 猿 小蠅

邪神 川狩 扇 扇 扇

夏 海月 沖鱠 鱠 鱠

ゞ 蝙蝠 夏

虫 蚕 蠅尻蟻 蚋 百日紅 さるすべり

楮紙 林檎 常盤木

撫子 大和撫子 唐撫子 石竹 ちこ

なつ 蓮 池見草 水芙蓉 みのむし

白萩 紅萩 沢瀉 河骨 菱の花

みとも 蒲の穂 日向葵 荒

和布刈 海松 松 時

計草 蘭 凌霄花

蟹 眼皮 後家花 虎

尾花 稲穂 紫 麻 麒麟

蓮 夕顔 ちけ 麻 こんく麻

青鬼灯 紅干 紫蘇 綿

の花 若荷 葛の花 南瓜

瓜 胡瓜 かも瓜 あま瓜 まこも瓜 茄子

ひも瓜 糸瓜 素麺 あぐり

茗荷 十八さげ 鶏冠草 ちく

唐茄子 鬼灯 鶏冠草

ゆうこ ちくべ

えんうもく 香薷 香薷 薏苡仁

朱耳花 御稜 御多洗 洗濯花 ぜんと

水無月の紙

秋 白藏 白帝 三秋 西皓 金秋 廣秋 火星

七月 孟秋 夷則 文月 七夕月 相月 開秋 相秋 七夜月 涼月 ゆく月 文ひろけ月

立秋 秋の初風 初て涼し 文月の秋 あなな涼 山粧 山 病

初風 冷凍 魂 人 弘暑

露 くれの露 秋の露 露ちれ 秋の露 雫 いさら波 雪の露 多ちの人 まこも

胸の苦　苦の香　苦のうゝ　稲妻　稲の夜　七日

の夕　七夕　星の祭り　天の川　鵲の橋　二星　しつけさ舟　二星会歌　牽牛　織女　星の祭り　天の川　鵲の橋　二星　会歌　牽牛　織女

夜星　男七夕　女七夕　七夕姫　素麺姫　さかめぐり　秋の夕　秋さる衣　梶の葉　庭の立翠　七筒池　乞巧天　宵針　揚　于紫盆

六月祭　迎火　送火　生魂　魂祭　緒　蓮の夜

中元　霊祭　聖霊会　盂蘭盆　大文字　妙法の火　焼茄　揚炊竜　送り火　施火　踊　小町どり　組踊　弘目どり

山田　衝突へり

地蔵祭　接待　延の峯入

相撲　小ゝ伏　辻ゝ角　御射山祭　かや　仮り

初鳥狩　小鳥狩　ゝゝ鳥　鳴笛　虫

虫多ゝひ　虫ゝり　虫あ名　虫籠　蟋蟀　虫山　別

鶏　石合まくれ　絵のまあへ　沙魚　鰯　扇

歯　ゝゝ　ゝゝ　彩糸　焼糸　彩綿

一茎草　相撲　折ちり　樹　櫛　櫛の花

唐桐の花　蜀漆の花　本槿

萩　萩の下葉　庭の人ま　古枝ま　太ふま　かあれ萩

紅葉ま　本萩　秋さま　萩の戸　萩され　萩上　風

風待ま　ゝ葉ま　男　ゝゝ　落ゝ　落

山下ま　秋ざめま　ゝゝ

ゝゝ落　みゝゝ　ゝの落　尾花

変波ま　変ま　あゝめゝ　胡

蔦　牽牛花　茶の花　女郎花

男　七　芭蕉　庭忌ま　麥者ま　地ゝ　ひま　ひ

人ぐゝ　あやゝ　ゝゝ　指挽　あのひ　ひ人ま　蘭

あくだ　ちぢばな　我木香　蘼香　小車花　大子草　捨子花
鼓金花　曼珠沙花　ちぢく花
益母草　ちまた　ここま　紀音草
茉莉草　夕切草　夢の草　秋海棠
蓋の花　翁草　たのぐま
蓼の花　もとて　ふたて　苦　松名草　不銀
蔵　ぐち　仙翁花　三七の花
条花　若荷の花　番椒
西瓜　絲瓜　刀豆　隠元豆　子稲
室の早稲　早田　莖の実花　律の調
平調　秋風不　千秋不　茎花

八月

仲秋　南呂　秋月　月名
竹春　葉月　紀月　涼月

たのむの花　八朔　竜田姫　月

望月　月のあて　月とあて　月の女
芋名月　三ヶ月　月の弓　月の徒
不紀夜月　新月　良夜　月の鏡　月見
星月夜　小月　名の月　名ちの月
月の姉　姉嫁　妹嫁　月見団子　玉の兎　無の花　暴風　初潮　駒迫　名月の頃　音京の頃　後の彼岸

秋の実　毛見　案山子　稲の穂　稲の穂　稲小屋　稲の穂　稲木　稲衣　稲衣
綾まれ　ちで歩　ちろちか　下り　簗　くだれ　簗　新酒
新帝　蒲萄酒　色酒　小春酒　寄酒

あ　雁　ア去　白ア　ひ　ひ　海ア
たか　二季鳥　ア糸鳥　ア風呂
腹ぐろ　帰雁　孔つ　ぐろ　鴫　鴫　鴫の羽
鴫の羽

時を移れば百羽ごと　稲屑多　鶉　熟鶉　熟鶉　熟鶉
うづら　赤　鶉　鶉　鶉　海二采　鶉
熟衣　鶉　鶉　鶉　鶉　鶉　鶉
鶉谷　移り雲雀　翡翠
搗子多　啄木多　火焼多
搗子多　赤　類白　むく多
翠雀　山雀　四十雀　子十
雀　燒赤　鶯　鶯　鶯　鹿
雄鹿　とく鹿　をぜ　蛇穴入　鯨
もみぢ多　鹿笛
狐　狐鍬　江鮭　さび鮭　ちあるい
ある　太刀魚　鰻　鰻築　小鰻
鰯　河鹿　赤犀　芙蓉
漆の花　棗　宇治

花園　茅場　牡丹の
多根　苔茅多根　鶯の花　房赤花
紅茅多　紫苑　鬼内　月多
うつぼ花　百夜多　風仙花
ふまま　ふまま
凡紅花　骨抜花　金風多
擅特花　竹萱　沢
楮梗　鶯多　東菊　清水
の花　車菊子　水引花　本
絨メ　蓋メ　茜メ　本綿花　ふくろ
たぐこ　鬼灯子　凡燕霞子
葛　玉葛　葛の花　稲　稲の花　ひのの花　ありけま　ひるむしろ
加子の花　胡麻　冬瓜　ぶらや　ぶらや　菜

大根 たまな菜 つまな大根 芩まく

芋 いもの花 ずいき 暮蘋 紫の花

伏見祭 十八日

九月

季秋 長月 菊月 穐月 本末の秋 初秋月 紅葉月

小田刈月 九秋 木染月 菊秋

夜寒 肌寒 秋寒 夜

長不断田歌 重陽宴

菊酒 後の雛 茱萸袋 重九 重の三弦 九日小袖 登高の

別 小豆祭 牛祭 だいごの 後の

月 十三夜 二夜月 豆名月 月の名所 住吉宝市

網代守 田の蛙 水 紅葉

狩菌 紅葉の古歌 尾越鹿

紅葉鮒 紅葉する鹿 狩丁

紅葉 色づく 色づくもの 檀 櫨

柞 白膠木 色不変杏

紅 花の名 名木苑 落葉する色

楊紅葉 梅と 木の実の類

梅嫌 南天の実 菊 百菊 菊合

百夜 星見草 笑り草 星見草

いそまつ 白粉草 形見草

ふくれ草 山名草 花の名

ひるがほの花 乙女花 沢女花

風和菊 翁草 ゆく紅 隠君子

秋もべの花 黄花 十日菊

赤のぶま こうらう 桔 佛

甲ま 多曽花 青木ま 白

粉花 芦の穂 芦の穂 珊瑚花

玄母の実　蔓菁根　茹菁

茸　茹菁　松茸　松蕈　柳茸　汁さけ　天狗さけ　鼠さけ

紅さけ　枯野の色　山の色　紫山の錦

錦繡の林　秋深さ　冬ゆく秋　秋うら淋

冬ごもり　岩倉宗　淀宗　古

紫宗　住吉神主　落ち

紅葉衣　菊襲　月夜　紫苑衣　衣　今年

米　新米　生稲

冬　冬　玄英　厳冬　陵冬　黒帝　静順　元冬

十月　孟冬　初冬　陽月　吉月　應鍾　神無月　時雨月

良月　小春月　小六月　小春

神の留る　霜　霜の天秋　霜の袴　霜の斧　霜無月

さゝひとま　霜月　霜のさら

竹多　本の紅竹多　松風の竹多

竹の留る　竹の留る

山眠　本枯

枯野　枯野の雪　寒し　夜と

紅葉　肌寒　さむさ夜

冬本　冬ごもり　冬籠

冬ごもり　炬燵　火燵切　囲炉裏

冬ごもり　炬燵　火燵　炉火　炉

ねのこ　玄猪

菊の宴　東

復ち開山忌　十夜会　日蓮忌　報恩　真福寺住む去

夷講　誓文　言文

忌

網代　網代守る　氷魚の役　夜真っ暗　漁

炭竈　白炭

炭竈　炭焼　獣

蒲団　紙袍　紙帽子　紙巾　納

豆汁　綿打　綿帽子　綿打ち　綿打ち　把打ち　水多

蜀葵 冬の末 冬の杏 水翁 鴨
ちくび 千鳥 村千鳥 ほとゝぎす 破衾

鯨 河豚 ふぐ汁 猿 華胥 臭

海鼠 山茶花 柔の花

八重の花 八重椿 枇杷花

榧の花 冬椿 早咲 柊の花

冬牡丹 冬菊 蒙吾花

落葉 木の葉 紅葉ちる

枯 葛切

麦まき

十月

黄鐘 仲冬 神無月 雪月 霜月 初陰月 神月

暦尖 冬至 一陽来復

雪 冬花 冬雪 初雪 世界 六出花 雪ちまた
初雪 初花 頃初花

不香花 雪吹 雪佛 雪女 霰 玉あられ 色変 氷 氷の くさび

氷面〳〵 氷竹 氷筍 氷柱

顔見世 御火焼 吹革 糸子 炭屋

灯 新堂會 冬牡丹

狩衣 山狩衣 小忌衣 山盛の袖 里狩衣 大忌衣 日蔭の糸

採物の杖 阿波女 掛〳〵 鼓、笹、弓、剣、 杖、笹

弦、杖、杖付 杖諸拳 撞木〳〵 大前法 文人 本綿四方 雑俳

階香取 服母子 ことと抗 閑聖 蛍 井奈聖 小前法 経角 大宮 漆田

しぐれ 千茶化人 早歌 星 吉々利々 得撰子 本綿化 雑歌 弓立 切倉

其弱 竈炭 酒炭 桂 ぐんだ花 昼目 旋燎 以上 香沓 脇

あっぱれ 雞子酒 みぞれ酒 あれば 寒

若鳥 鷹狩 意匠、杖、茶 呼声 鳥叫

追鳥狩 ひくめ鳥 鳥の落くさ
わたり鳥 箸 鳥立ともいふ ちりまき

をしへ 初鯨 鯨つく 初鰤 鮍

杜父魚 蠣 冬至梅 寒咲

の花 早梅 三椏 雪の下

水仙花 金盞 銀臺 大根引 蕪引 根深

一文字 寒菊 生薑市 空也忌

親鸞忌 茶食

十二月

季冬 臘月 極月 春待月
大呂 晩冬 除月 暮新月

三冬月 師走
親子月

乙子朔日 臘八 温糟粥 大神楽

月次祭 内侍所御神楽 正月

事始 歳暮 季御読経 仏名 被け綿

荷前使 図見 年忘 大原

雑居履 年内立春 小晦日 寒声

札取 歳暮 拵さえ 宝船 年忘 茶天狗 厚氷 としとり 蒼朮

勝の餅つく 寒着 三冬にわたる 冬の隣 衣配 年貢納

冬籠 付 寒造酒 節分 歳魂祭 年木樵

蟹 煤払 餅つき 餅花 正月飾物

うら 暦売 春の暦 ちくらく 門松 営立

八日 鰻 寒鯉 養ひ鯉 子梅 寒梅 臘梅 寒念仏

竹の子 追儺 鬼やらひ 鬼やら声 柊 篝

和布刈 神事 敷宮 納豆

流年 大としの 寒来 大三十日 除夜 大晦日 守歳 寒念仏

四季之詞終

四季の詞

柳の水 柳の浦 揚柳観音
柳樽 柳営 柳箱 柳下恵
鹿野苑 鹿の角 鹿の毛の筆
鹿と指て馬といふ 花がらし
花田染 花子の狂言 花聟
花嫁 花くらべ 花つゞみ
花かつら 灯の花 作り花
花丁子 花ぬり 花靫の穀
詞の花 波の花 花山
花の山 花車 花洛
中華 茶の花香 目星の花
花紅葉 樒の花 桜町 桜井
櫻の馬場 桜川 さくらの宮
さくら子 桜貝 桜の木
桜の盤 小さくら草の類
梅の花 梅壷 梅干 梅の木
藪縄 松のみどり 緑松 椿
松竹の落葉 若緑 若葉氏

若菜の節 若ばぐら 菜宇作
菜々 菜種 千菜 千蓋 若菜
菜飯 菜汁 柳ヶ谷 若者
八重葎 浅茅 芦 若の摺衣
黒牡丹 みの虫 玉虫 若の巣
鶯の巣 入鴨 都鳥 鶺鴒
蟷螂 かげろふ 猪 鯨のとし
馬の月毛 紫の尾 藻伝虫
若鳥 鵜鶘 雲雀毛 鷄 四十雀
佛の花 菜摘門 放生門
富士の雪 雪山童子 雪山
初風 西風 いなびかり 雷
秋津 月蔭 榎木 柏 椋 栃
若葉 土生姜 生牛房 生栗
梅干 干瓢 干蕨 干大根
小豆粥 和布 若菰 木の葉
山の薯 粟 きび 若麦
けし ぬか 葛餅 蕨餅
くずもち 餅つき 麦飯 若麦
若菜粥 氷餅 柿團粉 粟餅

湯風呂　居風呂　泔　紙水
草羽織　経帷子　紙帷　紙布
紙衾　菖布　芭蕉布　麦藁帽子
襪子　蹈皮　暖帳　麦湯布
氷豆腐　氷砂糖　麦宮粽　赤飯
蓮肉　経日　日待　材木　氷降
あるの風　人の月　胸月　八雪
眉の月　月の障　布旅　所お
踊念佛　盛げ　東接　衣子
簾　諏訪参　加茂参　まゝ扇
未廣　中啓　軍配団扇　霰釜
団炭　顔の紅ぶ　どんぐり眼
松蝦蟇　茨子酒　風接　
韮髪　椎仇　夕顔の上
空蟬の君　落葉の宮　布さし
郎神　呂の志ゝ人　神の名
諏布　
指の蚊　積穀　搗の紀
志賀の山越　ゑびさ　若菜人
十二支の類　稲田姫　黄泉
櫻谷　茶摘の若菜　竹子笠

ゝかあまゝあるべゝ　然ハ
准じて志ゝづゝあり但な
拳ゝ孔子を白紙ゝゝ
てゝゝ孝ゝと拾ゝゝあり

七十二候

東風解凍　正月　蟄虫始振　六月
魚上氷　十一日　獺祭魚　正月十一日
鴻鴈来　正月十五日　草木萌動　正月
桃始華　正月　倉庚鳴　二月六日
鷹化為鳩　二月十日　玄鳥至　二月十五日
雷乃発声　二月　始雷　二月
桐始華　三月　田鼠化鴽　三月六日
虹始見　三月十日　萍始生　三月十五日
鳥鳴拂羽　三月　戴勝降桑　三月
螻蛄鳴　四月　蚯蚓出　四月六日
王瓜生　四月十日　苦菜秀　四月十五日
靡草死　四月廿一日　麥秋至　四月
一説當冬

蟋蟀生　六月廿日
反古無声　十月廿日
蟋蟀始鳴　十月廿日
鹿角解　十月廿日
蟬始鳴　六月廿日
温風至　六月廿日
蟋蟀在壁　六月廿日
鷹乃学習　六月十六日
腐草為蛍　六月十六日
土潤溽暑　六月廿六日
大雨時行　六月廿六日
涼風至　七月廿日
白露降　七月六日
寒蟬鳴　七月十日
鷹乃祭鳥　七月十六日
天地始粛　七月廿六日
禾乃登　七月廿六日
鴻鴈来　八月廿六日
玄鳥帰　八月六日
群鳥養羞　八月十日
雷始収声　八月十六日
蟄虫坏戸　八月廿六日
水始涸　八月廿六日
鴻鴈来賓　九月廿六日
雀入大水為蛤　九月六日
菊有黄華　九月十日
劔乃祭獣　九月十六日
草木黄落　九月廿六日
蟄虫咸俯　九月廿六日
水始氷　十月廿日
地始凍　十月六日
雉入蛤化蜃　十月十日
虹蔵不見　十月十六日
天気外地気降　十月廿六日
閉塞成冬　十月廿六日

鶯鳴不鳴　十月廿日
虎始交　十月六日
荔挺出　十月十日
虹蜺始　十月十六日
麋角解　十月廿六日
水泉動　十月廿六日
鴈北郷　十二月廿六日
鵲始巣　十二月六日
雉始雊　十二月十日
雉始乳　十二月十六日
征鳥厲疾　十二月廿六日
水澤腹堅　十二月廿六日

右七十二候ハおの書ふを有ゝくゝをゝを時候と云べき方ゝ
ゝ附白ゝ用四ゝ五ゝ記ゝ多ゝ事ゝ
ゝもの系法ゝ云ゝあゝ方ゝ
今ゝ時候ゝ考ゝ
人の役ゝ法ゝ而已

連歌俳諧之古実

八雲御抄ニ云連歌むかしの五十
句百句ゝ法ゝくゝ
上の句ゝくゝ下の句ゝくゝを

言ひけつるを以て今の世にいたるまで中法師の中法師の
今の世にいたるまで賦物をもて中法師の家にもて
支配の賦物をもて中法師の家にもて
を万葉集八尼の歌にもとづきて
付き
さかりのあとをとどめあそばれ里と尼
かりそめにいとはひしうるわしき森
元き歌の振りにて已上又武蔵国
き歌の始は伊勢諸国を作業冊る
殿歌為信の唱和の法ぞ歌を連
歌の始にて法ぞ日本武のその
彩法羅波とき歌の上古にて人
良基公の時代と中興にて今
連歌は本式新式にてあり先
本式は只四式にて四式目は
建法二年の法於鎌倉藤谷冷泉
為相卿述作也本式目の文は別記書之四以前
百韻五十韻に法にて

なぐ上の句と言ひけるを下の句
と法ぞ下の句と言法ぞ上の句と法ぞ
而已にて歌と歌と歌と歌と歌と歌
あるべきもの歌は四式目にて
より連歌式目と称して百句五
十句にて歌にて連歌にて
句四式と改めて句にて連歌物式
にもて一説あり仮四式目法多
ちなみに今世用ひる所建二年
宗祇肖柏ぞ法ある所にて真行
ある又永禄の法六波羅普門院に
て真行ある紹巴ぞ法ある
にて法ぞ歌安仏法に世に四式と
本式まで法ある歌ぞ云ふも故
歌あり作法新式は後普光園
摂政良基公二条家安五年後光厳宇
改書かるる百韻の式ぞを建

治式ようもまろ所〳〵あり故に彩
式〳〵の人依て建治式と本式とを
定給ひ（建治二年より至弘安五年に九十七年に）
その後又後常園寺関白兼良公
一条禅閤と共に宗西宗砌と相
法あり〳〵享徳元年後花園帝書
加給ふと云彩式追加とのこと（寛安）
本ようを後肖柏　後柏原帝の
勅をうけて道遥院殿彩〳〵相法あ
（寛正元年より至享徳元年に八十一年に）
（寛正元年より至享徳元年に）
り書加られ
て文亀元年四月
〳〵と彩式今案〳〵の人（享徳元年より至文亀元年に）
〳〵と彩式とをまのりて
（年号）当代所用を連絡式目に
俳諧は山崎安の彩式とをまのりて
貞徳翁御傘の式と定られ
彩式一座一台の物は二台〳〵二
台の物は三台〳〵七台の物と又
台〳〵定られ又和法の式と

同じく山崎安の傘の自序に安
の新式と立て一座一台の物とは二
台不定七台の物と云台とやう
の〳〵而已ふ〳〵私の新法を二つを
いくさ〳〵作をたりうる和法の〳〵
く相たる〳〵ふものくしく云（以上師説）
又山御傘より仮おく俳式の数ど
十首の数〳〵つ〳〵孫まひて濃谷氏
示〳〵台ふ数あり〳〵〳〵記作
御傘執柄抄（其後翁述作）　同山書貞徳
翁芳稿あり〳〵ものくと〳〵（賢）と〳〵
あひて台ふ〳〵編〳〵〳〵校合
を無〳〵お捨あり〳〵と貞徳逝
去兼應二年癸巳の〳〵〳〵〳〵七
仮後〳〵芳稿の侵〳〵〳〵〳〵間抜〳〵
もの〳〵故〳〵山書間〳〵支所〳〵間支
と記〳〵又〳〵文字の落脱重仮色
山〳〵得と仮〳〵山傘と凡〳〵紀

なを正説は師家のに訣と侍て
あべし〳〵云〳〵或云本含真山上人
の編集せる連歌無言抄とかの物
いと実説多く誤り所侍る故に師
傘に無言抄の非説と巻のうち生
涯〳〵凡百三十ヶ條侍る之実
とゝ〳〵彼上人〳〵自法翁〳〵間
〳〵〳〵ざる故〳〵〳〵〳〵〳〵不和の
子細とあるいはくいつの者あり
且〳〵和歌を粗のせさら去る密
て文限り嘆りとゝ〳〵〳〵〳〵基〳〵凡
〳〵凡書や所〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
ぞ信とべ〳〵ぞ凡先書の誤と正
とは乃の迷と解とるべ〳〵〳〵〳〵
私あんや何ぞ不和〳〵〳〵〳〵
らんやとゝ〳〵〳〵凡書あり〳〵〳〵
眼の付所のあ〳〵凡あるべし

以上師説

聯歌和漢式 大意

後常恵寺関白殿下一条禅閤也享
法今案和漢篇四景物なホホ
負数和漢可通用事但雨嵐昔
古暁老等〳〵類和漢各可用之
一月季可隔七句月字来 恋述懐ホ
可隔五句月連終式 自余隔七句〳〳
物可隔五句隔五句〳〳物可隔
三句隔三句〳〳物可隔二句雑歩
雑物月是欠式目
一山類 水辺 居所ホ不可有付用
分別 上師説抄云右云負数
和漢可通用〳〳〳〳二の物と和
ホ一月漢〳〳一月の四の物又月表
有べ〳〳云物ハ分物べ〳〳一説云
二の物と漢の方に矣名べ〳〳
今一有 乎法の方文可張〳〳〳〳

又たゝ和流各可用々〻とハ一座一日の物ハ和二流一流一以上二ツ〻ゝ
や又ハ同季同字悪表懐ハ和流の時と連歌のごとく今ハ傘
ハ五日〻三日〻ふ定ゆゑ
ハ貞徳ゆゑ以ての先達氏紹巴
あ〻の方〻ゆゑ百韻の俳諧〻
同季と五日去〻同字悪表懐ハ
三日ゆゑ
て傘と定ゆゑ多ハ
方〻熟ゆゑ俳諧式和流ハ〻
相〻ふゆゑ〻
と申べ〻

連歌俳諧之差別

師説云傘多〻ゆゑ〻
昔ハ俳〻連〻の
けゆゑ俳言有て附ゆゑ連歌あ

ゆゑ掛ゆゑ連歌あ
諧をあ〻ハ宗
歌ゆゑ〻
室と結ひ
猿庵ハ
にとれ
いて
結〻
あゆゑ俳諧〻
圃〻
紙物と
べ〻貞徳流の俳諧〻紙物と五
ざ〻〻ハ決あゆゑ
ゆゑ師〻ゆゑ

宗鑑
宗祇

俳諧式十首之歌

長頭丸

俳諧ハ式目ゆゑ
和流の〻〻

科條ハ季原本條旗字
是欲のてゝくまろ人さろか
倆諧ハ六の五ヒ中ろへさく
七ろとハ入る五ろハ三ろて
名所田神低歌爲原無常
本條條向おをゝ沢そせ
あ丑や又山ろへの科用ハ
是欲のてゝくまろ人さ武
鬼女虎指の千るのの
面ろをそれど一座一ろて
新式の一座一ろハ二ろとハ
二ろの物とハ三ろあろ人
三ろあろ物ハ四あろ四ろ物
ハとゝくとろて五つあろ人
新式てゝゝ面と物ハ物
そのくいあゝくハ七ろて
連歌てハせるものろやちる酒
ろやけさ分ハ一座一ろて

寛永九年季冬中旬
右十首を相歌ハ漢谷長右衛門所
望ニ付詠ハ紛書云
漢谷氏記ハ文ハ常安ろ山
ろゝ好士ろ度く参ニ云せしハ考
小俳諧ハ式目ハ人ハ人と禁ハ
どを月ろ列どなるべき夏ハ
あゝどその人ゝ病裏ハ人ハ
をろゝぬろゝ行ろさろハ
大ろの歌ぎろとせとく秋
田良基を仕ろくいあへべく
ろをあろゝに利を左ろて書
付ろろをれを私ハあゝで生を
の役用ハあとをとへあゝ十
その方ハ法ハ科ハろとの所

十德ろく本

不詣叶神慮　不勤至佛果

不貫文高位　不親爲知音
不戀思愛別　不老知古今
不行見名所　不節遊花月
不移宜四季　不捨道憂世

右十法の初八雅人の作ゝを不知
一説云山門一音院人致師八圍碁
と好く風雅の志あり一宗砌法師
者ふ生涯とゝめ多人ゝを用
ひゝ知アで四風雅の乃ハ只推敲の
両界ゝ法而已何ぞ圍碁り
場の法あんやゝ明ゝ宗砌法十
法を書記して為ふ致大なる感
一方ひゝゝを仏り連歌を学
ひゝ終ゝ天下の達人ゝ多ゝ多の
ゝぞん致八連歌
七賢の一人之
法を八今生佛のゝをこのむ人
ハ法ゝ一みゝゝふづゝゝふ
ゝゝ

面八百ゝ素一并秘説

一発句ゝ仕掛ゝ変
連歌三数抄秘註云数句ハ一
連歌ゝ素の所と不連歌ゝ雪ゝ
ゝゝ俗言の姿とんゝうけ
紀紀藻ゝと凡ゝゝ其如五箱と
観じ春秋の移り行ゆゝ一月の物変
と悪風紙比真雑頌の六義と共へ
べゝゝ云ゝ俳諧又代後と本源ゝ
ゝて作意ハ所有平の雑法俚言
ゝと捨ゝて用ひべゝ
宮門氏口訣云夫数句ハ天ゝ和と
らゝて陽ゝゝゝ切字と加て一
句の文とあとゝゝ代天の法の明
ゝあゝゝたゝて一句の去ゝゝん
とゝゝと可思ゝ云ゝ悠ゝて数句
切字と入ゝハ行のゝちぞゝゝ人

てくハに伝あるてハ知べくなど
委仍秘説云切字あるてハ教自ふくハ
ドニ事をとる又教自ふあるいハ切
字ふくハ定ざる文字をとるあれハ伊
呂波四十七文字切字あるいハ和
所謂十八字の切字あるひハ不知の
説ニ事か大曲一一三名三限玄妙の
切字ふくハを早竟問言ふくひ
治定の二ツ又ハ五ツ云ふく切字口訣 別記ニ出
一服自ふくハ清 并秘説
師説云教自ハ二月ニ後ろをあ
べ一説ハ三時自と言ふ事不て
有ハ後ふのあるひあるもふを大を
ハ教自ふくハ添ふくふをあるきハ振
ふべ一説ハ教自の自ふの接投しハ
作者の接投作時の接投しハ
ハ投べ一あるひハ添付対付遠
付ハ付又頂ものあるいづれも張

自の付方ハ別記ニ出ふく
宮内氏秘伝云教自ハ天子ニ出ふく張
ハ地ニ出ふくて陽ハ下の自ふくハ
ニ事べ下ニ正一紀文字を垂きく
動きあるふの姿ふを旦弱字ふくハ
ふをハふくと云く
委仍秘書云教自ハ切字あるて
文字あ一張ハ動字をとふくて動キ
あるふのをばくとあるふを陰
陽和合の秘を個ハふあるふ云
右の説ふを伝ふて張自ハ教教
を正教文字あるふく教べ一 但
ふ不知ハ教自ハ或ハハ称字教ふを
いふをとあるきをに伝あれハ表
ふハあ一て一ぐて一
一頂曲の張ふを
師説云張自ニ出ふ自ふ一ふて
自張あるふをふがていつを

むけ七つの文字一句の中に一字
あるてハ法と爲ゝ又数句の匠
句のゝ紀ハ報ゝ法と曲ゝ曲ゝ秘
支ゝ手ハ法と詠ゝハ手ゝとゝべ
ゝゝゝ又手句の法爲も右七文
字と一字ゝゝゝゝゝゝ
又玄仍秘書云法と爲ごく時言
の法ゝゝ爲ゝゝゝゝゝ梅
句法 五月句の法 風をゝ紀法
あゝゝ 日のあゝ法 夜のゝゝ法 爲
ゝゝ法あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
不ゝ法ゝゝゝ 桂口傳
発句 梅咲ゝ桂山里とゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一発三ゝ支 并秘説 并名句説

連歌三部書曰発三ハ句ゝゝゝゝ紙
本ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ曲ゝ定法ゝ若
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

羽爲ゝ句ゝゝ曲 別れや 曲あを後
ゝゝゝ但ゝ内ゝゝゝゝゝ曲 別れや
曲ハ御ハゝあゝ物ゝ故あゝゝてゝの
曲 好べゝゝゝ 師説云ハゝあゝゝゝゝ
御玄の御ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
爲句系気の句あゝハゝ発三ハゝ
ゝゝゝゝ句あゝゝゝゝゝゝゝゝ爲句系
ゝゝゝゝ句あゝゝ発三ハ系気の句
べゝゝ或説云発三ハゝのゝゝ不付
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
句御玄ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
意ゝハてゝゝゝ俳諧を又ゝゝゝ
ゝゝゝゝ附ゝ御玄ゝゝゝゝゝゝ
角を義ゝ虎あゝゝゝゝゝゝゝゝ
者あゝの御ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
宮門氏口訣云一二とゝゝゝゝゝ
生ゝゝ三毎量の数とゝゝゝゝゝ

第三八百千万と生まるゝをふ
くひゝゝ
第三と文字にて曲ごとあり一説
云元ハ殺白銀白ふ丸字あるを
又銀とハ殺白ふ孫字銀に接
のて第ゝ打続き又ハ銀のゝ字ふ曲ゝ
ゝのゝ沢ハ第三文字曲ゝ文字曲ゝ下
の五文字五字仮名ゝゝハあゝ
ゝ生ゝを又ハの系物ゝゝハ五一
ゝゝと元秘夏之下五文字に元分
らの文字ゝのとあつゝく曲りの
あり行ゝゝゝ紀ゝゝゝを元ゝ 仮
諸暁山集ゝを山旨と秘夏ゝとして
ゝゝ当世代伝ゝゝゝ者色
弦ゝゝゝを一掬と編もべゝゝ
発る月ゝゝゝあの旬ゝ夜ゝの中
ワキ 雲路ゝゝゝゝゝゝの丁今
第三 老用ゝゝ波とまゝゝの泊紀

右ハ兼我の独吟ゝゝゝゝ又
元打栄焼山のゝゝ流ゝ
右ハ専順のゝ第三ゝゝ又仮諧ゝハ
紀梅千ゝゝ
発る 佐保姫のゝゝゝゝゝの
ワキ ひゝゝとゝゝゝゝゝ
第三 ゝの末天ゝゝゝゝゝ名ゝゝゝ
右連歌も仮諧を殺白のゝゝ
ゝ示ゝゝゝゝゝゝゝ又張ゝ腰のて
ゝゝ曲りも又てゝゝゝゝゝゝ泊
ゝゝ ゝゝゝを五字仮名ゝを
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ雑ゝ時ゝを物の系
物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝハ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
武人のゝ方山ハ桃青ゝゝのゝゝゝ
自ゝゝてゝゝゝゝゝハゝゝゝ暁山
集ゝ十八九ハ古人の詩と抑ゝ

ものなどを古人の
伝へふるゝを信ずべ
し只俗文暁山集とのみ名づけ
うふ而已しかるに亦云陸ちあが拙お
もふる俳諧を物式とのみとなれば
おもむくを山傘の説きに強りて
新式とのみ名づくるは古式に對して
名づくべし俳諧に但式あり
べし千宗の秋の中に俳諧に式目
ぞあれ大なるこゝろをもつて
物をあり何ぞ新式あんやと注
一説に曰しく友
義白物語のごとき第三あて曲
いまだ詳らかに但一概にはんぬべ
ぞあれに不苦ありなんば遠あく
出て用ゆるのみにかゝ
らざる又物曲の義白をとり
うるあり口伝を更にあり

必竟物曲ゆゑ曲を定る友
に非ずと多べし物に不定に
て ゆゑに不定を物に外にはなく
ぞは古伝に云義白は猿指になる人
猿とさけ猿になる人名三と扇り
なるは亦云義白を親になる人猿を
ゆになる人名三と聟になる人猿を
義白と帝になる人猿と呼下り
なる人名三とたるゆゑなり
太伝ものをもんは一を委細すは
は迷に非らざる先はいまだ所にあ
うたる伝者人とをえべし 私伝
一説猿に下劣の討あるに名
三に称字のかゝるあるべし
いまは強ゆるをもはんぬあるべ
あり一概にはんぬがし
一四句目に月并四句目ゆゑに
連俳にもふ四句目ゆゑそ

あどの拍子さ曲ふく一るも拍子
いくとく岩の中へあり物の名又
ハ字曲ふをいくとてあれども一る
の附ある拍子くく仕立るあひし
なくべも製と仕く葩変と仕ずど
ごんあ〳〵をいくゆくさ四る目ふ
つくふくそ

師説云宮川氏口訣云四る目ハ拍子
く仕立ごく扨要ハ拍子を変る
ふう一巻のそ尾を成ちとりを
のくべ至拍のハひあるのだ出る目
ぶりとふけふりの字口伝あくてハ
去あふつ〳〵ち方ハ振のなふ
どくんひふハきのあるべくこを
あくてハ出るくぶりく四る目ふ
つくふ名目をあどさ子細ふ
ちとて面の八る変三ふ以下ハ別
てゆくくふ拍子いくとるあれが

六る目ふ八る目ふくくをいくべ
おどいるを製ふく葩変と仕ずく
くをいるを四る目ふの一曲ふ
あべく拍子を年下紛の拍拍
などふを四る目八る目ハ目ハくの未座
あ方ふ仕ひくく人を又ハ初んの
役くく似今まくく功者分の人と
ちくくを兼相ふ拍くちどくくい
へつ考べくちどて表八る八人
の面のどくく眼耳鼻口の歯所
正くく梁和あつとうくく仕世
をゆくくちどくふハ醜新くあう
べくくをいつを拍と兼相ふ拍
くちくいんひどく

一五る目くく変

師説云三て五ちんくく変三て
曲あくべる目くく孫字あてと
ちべくく変三ち孫曲あくべ仕世

て笛にあるべし　数ら笛ら
笛八分の一拍子なく尚ほ
くのごとく作べし七分目まくいてと
べしこれを表とする作らば
他と兼ねたくむふの都ち如
物くに可依的宜先八分
一六分目の夕
別にあ細にたぐ名くんぐぬ
指くる他附ちろ物要え
一七分目の夕
此所まくく面の月おどへ兼
下月の定座とあ夜分天象
無拍指合あべ八分目ふ月と
えとらぶ月とくく拍とと
まに拍月のるおの他者兼
ふぐさ夕ふて
一八分目の夕
別のみ細にに数ら面の中婦人詞

多にを詞に宗養云
名所歌抄紙尺義疑無常
歌懷衣傷月字とハせと
まれ兼月の分無名の煩　左迂
寢覺或八分やを記詞乃具ぐ
開拾ふ物あべ
一面八分ぐふ浮
右傳云義分ハ如親級分ハ如子義
三ハ如甥　或如君　四分目ハ如嬢　或
如臣　五分目ハ如客　六分目ハ如
七分目ハ如天　八分目ハ如地
一九分目　裏移分十分目の夕
連歌くろく九分目ろ何
ふくを四まひの夕に拍くを表
無者ふ分付ふ面八分目を人を
座にて九分目に月ぐ友に帰
見くくを無ぐる面八分
目一拍ちにてる分ぐりハ

何と附くとも不苦只言あるべしと
白八九白目ふりまくく或八紙にを
無者ことを本懐とを引ゐ方く
仙境ゐりく〳〵効へく低らべし仙
裏掛の〻多者くく人の油注せぬこ
〳〵只裏ことを〳〵ハ何と付ても
不苦く却ゐる而色〻ゐもまれん沼
多くべし時のゐ多ぐ別るゐく〳〵
むべ〳〵十白目ゐうハ行ゐくも掛
ひゐ〳〵ゐ連俗のゐゐ目く又五表
十ゐ〳〵ゐハ〻あり
一裏ふハ五表十ゐ〳〵ゐハ〻ゐ表俗
あゐべ〳〵五ゐ〳〵ハ六白目ゐう表
と仕ゐゐと十一白目ゐう一切掛物
詩砂あゐべ紙十三白目の紙ゐう
ゐる方く紙ゐを表ゐるれハ紙と
引上或ハ他李の紙をあをゐを
勉ゐる紙ハ貴人上客ゐいゐとめ

ゐをハ俗者の不孔くゐ〳〵ゐく
を陳ゐあゐゐでゐとゐを作意
ハ〻の変万化の術あゐべ〳〵但独
以ゐくハ各別ゐ勉ゐ独紙ゐハ白
俗行層ゐぐハゐゐゐゆ〳〵物ゐれハ
表白張ゐゐゐ百勢の格式ゐく
背でゐを只掛張のゐ白張くゐ
ぐゐ紙ゐ保本ゐの格式と守て毎
白勉ゐゐハ鬼ゐ紙掛ゐ
一揚白ゐ紙又名同のひゐ〳〵ゐて白
術一格ゐ他の白ふ紙ゐべゐ
師流云揚白ハ表白ゐ〳〵字と媒
力俗表白ゐ〳〵勢ゐゐ〳〵ぬゐ紙
紙ゐゐ〻ゐ是一の用白ゐ
宮門氏ハ訣云白術ゐを紙ハ張
ふ表〳〵脛ゐ時ハ巻軸の後ゐ
ゐ中と紙ゐ紙ハ平白に表〳〵
ゐ紙ゐゐゐゐと時ハ代く

容易の句所々あるべし
撰べつくしがたし 所説云揚
句作し指合あるべし
かんきょう見渡しるの指合と無
二三句と安しべ重て死と成
死の句所々せの附合十句あるべし
とも速ふ句とも
速懐句死句あやしくうまい
しれ風情なくあるべし
和歌の組類をも四季恋雑歌
組て巻物ふるべし歌の歌あり
連俳一巻の首尾を見たけ
句を揚句八歌の歌よりあるべし
又しるし仮上所説

連俳両用之詞

一説云物名声を讀字は皆俳諧
とあるべし仮名一概よりは

例 俳師士 優 婆塞 蛇 竜
賀 詩類 戈 意 宿世 縁
火 闍伽 律 堂 搗 地 几帳
蝶 菊 蘭 恋 琵琶 芭蕉
衛士 俳良 無礼 脇息 海物
屏風 陸奥 圍碁 気色 菓子
極

句を歌ふと声を用ひ外
あるべし

數字之文

近年和の書云物名の数字の
らのやうに文字は声ふくと訓
ふくを七夕(たなばた)二十(はたち)十重(とへ)
面と成る八百千万は折と類
しくもるべしくもり今は類ともる
人多しるを俗筆ふとあるは格式

なるべし 私に云 一文字ハ連ニ面二
一法 あれハ俳ニハ声ニ談ニくと
訓によりても七句去るべし 余
の数字ハ連ニ四 あれハ俳ニハ声
によりても訓によりても一座二
五ッの物と云 鉄ハ一文字を七句
去ハ可也 二ッ折ニ十また面を嫌ふて
ニ出るもよし ハ甚 不可と云ニ
て ハ一座ニ八ッの物と定る八ッあり
物によらず新式に四ッの物あるを
定べし 連歌ニ四ッの物ハ俳諧ニ五
あり 根まで百千万ハ其折を嫌ふ
と定べしく 見るを去ニ 此あり
新式云 一文字ハ大切にする事多く
皆面可用と条可詰と云て 余ハ
数字ハ可 面折 就所用て差別
有事也 云 私のごとくあって
十と百との差別なし 句編面に

折との差別ハ何れの式にもやん
嫌ふべし 只此傘を定るに二ヶ
所との嫌ひなり同くもべし

字去りと云事 字去とハ三句去りを云

今年京都の書にて字去りの詞
と挙る中に海の字空の字を
も字去りといへるもの不審なれ
ゆゑに海ハ新式に一座一句
の所に当空の字ハ一座四句の物
の中にあれども此の字数字
居の字をも字去りといへる太き
誤り 殊の字ハ連歌にハ物へく
二ッの事止奈利にハ一ッとなる
ゆゑ新詞を三句去りといふ
もし ハ嫌ふべし 審に吾に
も時の字居の字をも 字去り
とせし 故に当時 多く 見れば

もろ〳〵の悪人（但し居八衙爺、老者、諸人）新式に八時を展る
四つの物〳〵と止奈利ゐを折に一
作〳〵に人つて仏弁字紀記とを
字去り部ぜうるを年乞に有さ
ゐ〳〵ものゐ〳〵おゐ又数字部に而
沙汰に却ぢ以後もあゐ〳〵
ゐり部委八新式とゐ〳〵く明らむ

べー

右數字并字去りの記ゐの小物
人の仮りゐ人書小部ゐ部ぢも部
物人と俗ぐゐと部べー友に今
師説と巻を一〳〵実記賀

附句〳〵用捨并八衛しる

連歌に八衛十六衛世四衛平
八衛八十衛部ぐ〳〵に附句の衛ゐ
俳諧八品仏八衛と物要〳〵と所謂
四十八衛八十衛も仏八衛ゐ品に

たゐ物〳〵と八字の〳〵八ッ八 平付 遠付
四ッ付 仏作付 付付 付付 部付 部付 ゐり又云 隠
人付 部付 部付 記付 部付

隠 説 逆の四ゐ〳〵ものゐ
作部ぐ〳〵て八書ゐ〳〵ぐ〳〵ゐ
私ゐ〳〵ゐゐあり衛用虚実の
人ゐあり又古風ゐ〳〵ゐ
ゐて〳〵ゐたく八芋〳〵ゐ八〳〵疱
瘡と付唐土ゐ〳〵ゐ脳指部ぐ
ゐ部ぐ付ゐ〳〵ゐ中に衛用の二八ッ
附句ゐ〳〵ゐ仏ぐ〳〵
當世付ゐの瘡と好ゐ〳〵ゐ
の付〳〵ゐ羽捨ぐゐ平と口ゐまゐ
ゐ友に物人の人多くゐ門に用付
の句〳〵ゐ〳〵ゐ耳に物の書ゐも
又て作ゐ兼載の書に云物ゐ付句
ゐ〳〵ゐて八下ゐ〳〵ゐ及甲に
ゐ〳〵ゐの人をゐ句〳〵捨ゐ平を
捨ぐ〳〵て付ゐ部ぐ〳〵ゐ用の貴部

扨又候今ハ謎とかるゝものゝ留ひ
つゝ吹報ゝゝ〳〵あるゝ〳〵鬼
こそゆゝゝいやまへこゝろ
人こそ〳〵ゝ〳〵ゝ謎と解
と解こゝろハ人とゝ〳〵ゝ
こゝ〳〵ゝ〳〵ゝの友とそ
いやそれいこゝを
用こゝなゝゝこそ
二ッ四ッ四あるふんを
法〳〵ハ法のこゝ
ちゝゝこゝ〳〵ゝ
んゝゝ〳〵只一
字ゝをんこゝ

俳諧百韻こゝ式

面八分 七夕目月 定座 裏十四 八九夕目ヨリ月秋こゝ十三夕花定座
三面十四 月ノ座 二裏十四 初ウラニハ
三面十四 ニテ面ハ 三裏十四 ニウラニハ

表面十四 三面ハ 余波裏分 七夕目花定座 ヨリ五番花ト一口付

七十二候こゝ式、

面八分 七夕目月 定座 裏十四 九月ヨリ月秋十三夕月花ノ座
三面十四 月ノ座 二裏十四、 初ウラニハ
表面十四 ニテ面ハ 余波裏分 七夕目花
たゝ七十二候ハ百韻の二ノ折面裏
一折と略せ〳〵ものゝ

源氏こゝ韻式

面六分 十夕目月 裏十二 八夕目ヨリ月秋十夕目花
三面十二 月十夕目 二裏十二、 初ウラニハ
余波面十二、 ニテ面ハ 余裏六、 十夕目花

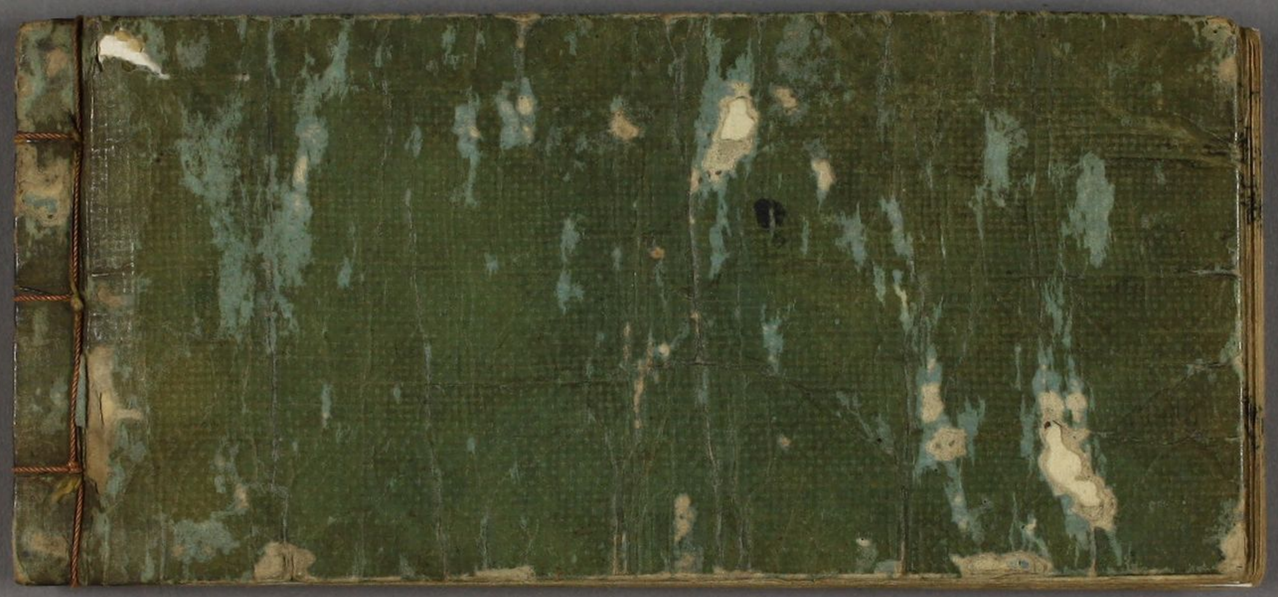
世吉こゝ式

面八分 七夕目月 裏十四 九夕目ヨリ月秋夕十三夕目花ノ座
余波面十四、 十三夕目月 裏分 七夕目花ノ座 定座

欽仙こゝ式

面六月　五月目月　裏十二、八月目三月　秋十月目花坐
余波面十六　上月目月　裏六、五月目花坐
右之外能々談　面四月　裏八月
扨々類　面四月　ウラ十四、の式あくまで
とも続篇多出べ月紙の座り
むり紙物多有之月紙と一百
むさぶ月多く當時用月の少稀
多り物ちい和人八面約の式ろ外八
なり余八皆略せ物ちく中真よ
このもの式俳説ハ行り
一さいうの字雖有拔々誹諧俳諧
成法俳と用り
誹ハ車尾切音非也無俳音雖拔古今後拾き
名歌仮用誹字是さいうあれ詩く
俳皮爲切字集云作優、雜戲也　和訓たわむれ
諧雄皆切音諧也和也合也　偽也　和訓やわらく
俳諧の二字とわさきく訓を文
詩あり所まで書てひらむべし所

江好む所まで書べし　或説ニ曰
たいうハ俳諧の字と用るハ古人
変也ハ詩あべし　但誹書
誹言　誹士彩く誹字一字ハ
ていさいくハらく彩くや且字義
を表ハ見ハ字ものく仕ハ
俳字と用る八切りくハ
右之外抵釈義悪ハ訓文数
白表ハ字ハ切字ハ表ハの
去姪とのく後篇ハ有之べし

宝暦九巳卯年
九月吉日

大阪書林
奈良屋長兵衛